シンポジウム／「演じる戦争・観る聴く戦争」

「演じる戦争・観る聴く戦争」

とは何だったのか

— 例会シンポジウムの試みから —

飯倉 義之

一 戦争研究の潮流

シンポジウム「演じる戦争・観る聴く戦争—口承文芸から戦争を考える—」は、日本口承文芸学会例会として、二〇〇八年一〇月二五日に國學院大學で行なわれた。

このタイトルはあるいはセンセーショナルにすぎると受け取られたかもしれない。戦争はする／される現実の行為として、また語り／聞くべき実体験として、厳然と存在しているからだ。演じる／観る聴くという問いの立て方は、戦争を相対化の名の下に空洞化し、その事実の重みを無化しかねない危険性がある。それでもなお、いま「演じる戦争・観る聴く戦争」という問いかけが必要と考えたのである。本報告ではシンポジウムの狙いと、開催に至るまでの準備研究会の経緯を概観する。

「演じる戦争・観る聴く戦争」という問いは、近年の民俗学・口承文芸における戦争研究の延長上にある。まずは民俗学・口承文芸における戦争研究の潮流を整理してみよう。

民俗学における戦争研究は、大きく三つの流れがある。まず戦争が現在進行形であった一九三〇年代に民俗学研究誌に寄せられたのは、徴兵忌避や弾除けの俗信、神仏の出征の噂の報告等であった^①。それらは戦争を自然災害同様の異常時とみなし、戦時の民俗を異常時における常民の民俗・心意現象ととらえる態度からの報告といえる。

次に戦争がクローズアップされるのは、「語り継ぐべき戦争」としてである。一九七〇年代より、軍隊経験・戦場体験の語りの聞き取りと報告が、歴史学における地方史の掘り起こしや、生活史・自分史への注目と歩調を合わせながら行なわれた。また戦時下・戦後の世間話から、「戦争に巻き込まれた民衆」の心意・生活を照射する資料が多く報告された。こうした戦争への注目は、米ソの対立からくる第三次世界大戦への不安や、保守政権による再軍備化の懸念を受けての、反戦活動としての意味合いも持っていた。これら「戦争の民話」「戦争の語り」は、「民話運動」の柱の一つとして重視され、日本民話の会を軸として蓄積された資料は松谷みよ子『現代民話考』などに結実した。^{②③}

上記の二つの流れは、「現場で何が起きたのか」という、「した／された」事実とその意味付けを巡ってなされた戦争研究とまとめうる。

そうした戦争研究が一九九〇年代後半より転換する。戦争研究が事実の検証を離れ、戦争が「どのように伝えられ、受け止められたか」、また「どのように記憶され、記録され、語られ

たのか」を問う態度である。それは一言でまとめれば「戦争の表象研究」といえるだろう。こうした「事実の検証から表象へ」という転換は、人文・社会科学全般の流れであり、民俗学では特に歴史学・社会学などの隣接諸科学から強く影響を受けたはずである。

二 戦争の表象研究

一九九〇年代後半より歴史学における戦争研究は、国家を単位とした戦争の史実の検証から、戦時・戦後における国家の戦争観が形作った国民生活や、軍隊組織内部の生活や軍都と呼ばれた都市を対象としたミクロな戦時社会の研究などへと問題点を移していった。またオーラルヒストリーの視点から、これまでは史実と異なるとして無視されてきたような戦争体験に注目し、そうした体験を語るということの意味を問う研究もなされた。

社会学における戦争研究も、かつては社会心理学の立場からの戦時流言の研究が主流であったが、この時期より戦争を「メディア」としてとらえるメディア研究や、戦後における「戦争」「軍隊」「反戦」をめぐる言説の研究など、社会が戦争をどのよう⁽⁴⁾に受け入れ、そして表したかを問う、歴史社会的な研究へとシフトしていく。

文学における戦争研究は、かつては戦争文学というジャンル論と、作家たちの反戦／戦争協力や、作品への影響を論じた作家論・作品論が主であったが、この時期には「戦争を書くこと

はどのような行為か」という問いが繰り返された。また美術史や宗教学などにおいても、こうした潮流と歩調を合わせた研究の蓄積がなされていった。

こうした「戦争の表象研究」を言い換えると、戦争そのものを論じるのではなく、戦争がいかに広められ、いかに記憶されたかを論じる方向への転換としていいだろう。

民俗学・口承文芸研究における「戦争の表象研究」には、大きく分けて二つのトピックがある。一つは戦時の慰霊と顕彰に注目して、国家がメディアやイベントを通じてムラ・家・個人を戦争に接続させていく、その表象を問う研究。いま一つは戦争が芸能や娯楽のメディアでどのように表象され、生活の一部として浸透したかを問う研究である。⁽⁴⁾

「演じる戦争・見る聴く戦争」という問題提起は、後者の視角より導かれたものである。戦争という制度と思考のありようが、国家の施策やプロパガンダだけでなく、口頭芸や巡回展示といったマイナーなメディアを通して日常に浸透していくありさま、すなわち戦争が国民ひとりひとりに身体化されていく過程を、現場の声に寄り添って記述する試みといえる。この視角からはすでに、本シンポジウムにおいて発表を依頼した二人、真鍋昌賢が戦時中の浪曲師や浪曲映画を題材に戦争のある日常の芸能について発言していたし、丸山泰明は八甲田山遭難事件の巡回展示や靖国神社遊就館の常設展示のありようから、戦争をディスプレイする営みの研究を積み重ねていた。⁽⁵⁾

こうした「娯楽としての戦争」は、戦争体験の語りとはかけ離れたものに思われている。だが戦中には戦場の手柄話や外地の美談が、戦後には戦場や銃後の苦勞が語られ／聴かれた。それは体験者によって「演じ」られた戦争を、聴き手が追体験として「観る聴く」行為である。戦争の浪曲や映画や展示を、「演じ」られた戦争を聴衆が追体験として「観る聴く」ための仕組みと考えれば、それは口承文芸における戦争のありようとも相似形であるとわかるはずだ。そして戦争はそのような、日常にありふれたことばの流通をもって、戦場や銃後から離れた人々を、あるいは無自覚に、あるいは自覚的に、戦争へと巻き込んでいくものなのだということが、見えてくる。

「戦争の表象研究」は、戦争を戦場、すなわち戦争の現場にとじこめず、戦争のある日常を生きた人々の生活を総合的に描こうとする点で、戦争体験の記憶や語りの意義を問う研究と通底する。国家的・政治史的な「戦争」ではなく、個人や家、共同体単位の「戦争」受容の現場をいかにしてとらえるか。それは口承研究の得意とする「身体や五感を通じての受容の回路をみつめる」手法によってこそ、可能なのではないだろうか。

三 準備会を経過して

上記のような「戦争研究」観は最初からあったものではない。初発にあったのは、フィールドワーカーがだれしも抱えている「戦争体験の聴き書き」の断片的な資料と正面から向き合い、

口承文芸からの戦争研究をとらえ直してみようという漠然とした問題意識が「演じる戦争・観る聴く戦争」へと固まったのは、半年をかけた準備会を経てである。

準備会は藤井貞和・高木史人・飯倉を中心に、前述の真鍋・丸山をはじめとして、戦争と民俗学・口承文芸というテーマに関心のある研究者を集め、全四回が行われた。

第一回は二〇〇八年四月二六日（立正大学）、発表者は高木・飯倉。高木が「『さまよえる英霊たち』再読・覚書」として田中丸勝彦『さまよえる英霊たち』を書評し、演じられる戦争という問題を、民俗学・口承文芸から論じる可能性を指摘。飯倉が「文献の整理」として戦争研究の動向を整理した。

第二回は六月二八日（日本大学文学部）、発表者は丸山泰明・塚田修一・金子毅。丸山は「八甲田山雪中行軍遭難事件の民俗誌的研究」として八甲田山事件が「展示」を通していかに悲劇として表象され演じられたかを論じ、それに塚田が社会学の立場からコメントをした。金子は「創出された銃後の物語——国策映画『熱風』に見る産業戦士像——」として、映画『熱風』（東宝、一九四三）を上映。製鉄所の職工に課せられた鉄の増産という労働が、鉄Ⅱ兵器という論理を通じて戦争の一部、戦場の延長に位置づけられ、溶鉱炉が「戦場」、工具が「産業戦士」、労働が「戦闘行為」として描かれていることを示した。

第三回は七月三二日（京橋・フィルムセンター）、発表者は真鍋昌賢・矢野敬一。真鍋は「天中軒雲月について——女浪曲師

と戦争」として、雲月の浪曲映画を上映、映画やラジオといった声のメディアと、浪曲の声という身体と、戦争との交点を示した。矢野は「映画『靖国』―御神体「靖国刀」という誤りからの問い」として、二〇〇八年夏に国会議員からの試写会要求や右翼による上映中止運動で話題を呼んだ映画『靖国 YASUKUNI』（李纓監督、二〇〇七）をとりあげ、その重要なプロットである「靖国神社の御神体は刀剣である」という認識が誤りであること、しかし「靖国」批判の言説もその事実を批判できていないことを示し、映画を巡る議論が空洞であったことを指摘した。

四回目は一〇月二日（江戸川区小松川さくらセンター）、発表者は野村敬子・村山絵美。野村は「戦争体験を聞くということ・語るということ」として、体験者が戦争体験を語りうるということ・語りえないということは、構造化された戦争から人間が分離・解放される過程なのではないかということ、フィールドでの出会いから述べた。村山は「戦死者の霊魂をめぐる記憶と語り―沖繩の民間巫者・ユタの慰霊から―」と題して、ユタのハンジ（託宣）を通して立ち上がり、生者に共有される死者の戦争体験について報告した。

四 「戦争のある日常」という問い

前項の議論を経て問いを深化し、シンポジウムの目を迎えた。当日は飯倉が「イントロダクション―いかにして「口承文芸か

ら戦争を考える」か」として上記の経緯を解説し、丸山泰明「バフォーマンスとしての戦争展示―遊就館から考える―」、真鍋昌賢「戦時下に響く七色の声―浪花節における二代目天中軒雲月の位置づけ―」、野村敬子「戦争体験を聞くということ・語るということ―新田小太郎さんをめぐって―」の発表が行なわれた。「演じる／観る聴く」という、戦争の娯楽化ともたられかねないタイトルに、抵抗や誤解があるかと案じたが、取り越し苦労であった。

丸山・真鍋発表が具体的な「戦争の表象研究」を提示し、続く野村発表が、その問いがメディアのレベルに留まるものではなく、体験の語りにも「演じる・観る聴く」という性質があることを示していたかと思う。

戦争という体験は一個の人間を超越した経験であり、それを語るには「演じる」こと―自らと戦争との間に客観的な距離を作ることが必要となる。体験者は本当の意味で戦争から解放されるまで、戦争を語りえないのではないかということ、それはあらゆる出来事に対して語りが抱える本質的な表象不可能性ではないかということ、野村発表から考えた。

そしてメジャーであったりマイナーであったりする、日常のメディアを通じて、客観的な距離を「演じ」つつ戦争は生活の細部へとじわじわと浸透し、のつびきらならない状況に人々を巻き込んでいくということを、丸山・真鍋発表から感じ取るこ

とができた。

戦争がはびこる言葉の使われ方に敏感であること―それが口承文芸研究が現実の「戦争」に対抗してなしうることなのかもしれない。

注

- (1) 主要誌に限って例を挙げる。岡田健文「徴兵避けのお詣り」『郷土研究』五七七、一九三一・一二。山田良隆「千人結び」『民間伝承』二二二、一九三七・八。高橋盛孝「神様の出征」『民間伝承』三二二、一九三七・一〇。鈴木棠三「事変と信仰の活動」『民間伝承』三一四、一九三七・一二。篠田定吉「日支事変と俗信」『民間伝承』三一五、一九三八・一。山田隆夫「銃後の民俗」『旅と伝説』一一一、一九三八・二。など。
- (2) 戦争の民話、特に「死の知らせ」などの世間話について、岡山の立石憲利が積極的な採訪と報告とを行なっている。立石憲利「息子は帰ってきた」手帖舎、一九八五。同「戦場からの知らせ」同、一九八九。同「夢のなかの息子」吉備人出版、二〇〇五、など。
- (3) 「特集・語りつぐ戦争」『民話の手帖』二五、一九八五・一〇。松谷みよ子『現代民話考』二・軍隊、立風書房、一九八五（筑摩書房「ちくま文庫」二〇〇三）。同『現代民話考』六、銃後、同、一九八七（同、二〇〇三）。日本民話の会『戦争と民話』童心社、一九九五、など。

- (4) 前者については、喜多村理子が「トピックス 戦争と民俗」『日本民俗学』二四七、二〇〇六・八において、「日本民俗学が得意としてきた「信仰」と「死者のまつり」に焦点をあてて」「同…一九七」民俗学における戦争研究の潮流をまとめている。ここでは、喜多村理子「徴兵・戦争と民衆」吉川弘文館、一九九九。川村邦光「戦死者のゆくえ」青弓社、二〇〇〇。田中丸勝彦「さまよえる英霊たち」柏書房、二〇〇二。岩田重則「戦死者靈魂のゆくえ」吉川弘文館、二〇〇三。矢野敬一「慰霊・追悼・顕彰の近代」吉川弘文館、二〇〇六。また後述の真鍋・丸山論文等の論考がとりあげられている。

- (5) 真鍋昌賢「愛国浪曲をめぐる葛藤」『大阪大学日本学報』一六、一九九七・三。同「乃木さんのひとり歩き」『説話・伝承学』六、一九九八・四。同「戦時下における教育紙芝居の上演現場」『待兼山論叢』日本学篇三、一九九八・一二。同「戦争体制と職業的な口頭芸」『国立歴史民俗博物館研究報告』九二、二〇〇一・三、など。

- 丸山泰明「モニュメントと記憶」『日本民俗学』二三八、二〇〇四・五。同「モニュメントと眼ざしの近代」『都市の暮らしの民俗学』二、吉川弘文館、二〇〇六。同「兵士の死をめぐる展示」『大阪大学日本学報』二六、二〇〇七・三、など。

(い) いくら・よしゆき／国際日本文化研究センター機関研究員